

令和5年度島根県立大学短期大学部
一般選抜
保育学科 小論文問題

【問題】

次の文章をふまえ、子どもが育つうえで大事にすべきことをその理由とともに 800 字以内で論述せよ。なお、論述にはふさわしい題名をつけよ。(100 点)

ときどき、こんなエピソードをききます。

生後7か月になっても、寝返りをする気配がないAちゃん。親は「うちの子、発達が遅いのかしら」と悩みます。当のAちゃんは、首もすわり、体重もしっかり増えていて、離乳食もよく食べ、血色も表情もいい。でも、寝返りしない。春になってあたたかくなったある日、お母さんが思いきって近所の子育てひろばにわが子を連れていきました。Aちゃんはだっこされながら、まわりの赤ちゃんをジーッと眺めていました。とくに赤ちゃん同士のかかわりはなく、見ていただけでした。その日の夜、お風呂上りにバスタオルの上にAちゃんを寝かせて、お母さんがベビークリームを取りにいく数秒のあいだに、Aちゃんがうつ伏せになっていました。お母さんは驚いて、おもわず仰向けにもどしました。すると、今度はお母さんの目の前で、Aちゃんが身をよじって寝返りをしようとするのです。その日を境に、Aちゃんは寝返りをしはじめました……。

Aちゃんの変化は、「発達」というよりも、むしろ「できごと」だと考えたほうがよいと思っています。きっと、寝返りをするための神経系や筋肉などの準備はだいたいできていたのです。でも、それを実現するきっかけが、親子2人の生活にはなかったのかもしれない。同じくらいの子の姿をよく見たことがきっかけで、Aちゃんの寝返り実現スイッチがONになったのでしょう。この一連が、「できごと」として、親子の生活に節をきざんでいきます。

おとながどんなに子どもの発達を期待したとしても、変わるのは子ども自身ということになります。植物をひっぱってもものばすことはできず、つぼみを無理やり開いても枯れてしまうように、子どもも自らタイミングをはかって変わっていくのです。それは単に生物学的な成熟というだけでなく、何かの“きっかけ（できごと）”がその子を変えていくということ、そしてそれがまた周囲を変えていく“きっかけ”になるということを、発達理解のなかにしっかり位置づけておきたいと思います。

人間が、長い年月をかけて種として共有・継承してきた遺伝情報（ゲノム）により、私たちには一定の時期に一定の順序性をもってある行動や心理特性を習得しうる「発達の節」が想定されます。これまでの科学的発達研究の成果にもとづき、発達の節にかんする仮説が立てられることによって、たとえば、4か月、10か月、1歳半というような乳幼児健診システムが整備されてきたのです。ただし、研究成果というものはすべて「過去のもの」であり、それぞれの当事者にとっては「他者のもの」にすぎないという事実も、対人援助の仕事にた

ずさわるときは、忘れてはならないのだと思います。

それぞれの子どもは、一度きりの固有の人生を歩んでいるのであり、親は「この子」がいつ何をきっかけにどう変わっていくのか（育っていくのか）に関心があります。これは統計的標準から多数の子どもを評価する専門家とは異なる視点であり、リアリティだと思います。一般的な説明はピンときませんし、標準にもとづく理解は親子を追いつめさせます。月なみではありますが、やはりその子はどんな子で、何が好きで、どんな毎日を過ごしている生活者なのかを具体的に知り、共有することが大事だと思います。それによって、その子自身がかわっていく“きっかけ”を考えていくということが、もう一つの発達理解の側面だと思うのです。これを、「発達の節」と対比させて「できごとの節」と呼んでおきたいと思います。

できごとの節には、「こういうふうになるかな」「こんな出会いがあるといいな」という未来への期待がかかわっていますが、何ができごとの節になるかは、事後的にしか特定できないものです。でも、すべて単なる偶然というのではなくて、生活者としてのその子がある程度分かっている人だけが、できごとの節を想像できるのであり、後にその意味を考えることができるのです。ここで、『子どもたちの 100 の言葉』で知られるローリス・マラグッツィの名句を引用しておくべきでしょう。大宮勇雄さんの訳出です。

「私たちが計画やカリキュラムを持っていないのは真実です。しかし、準備もなしの即興でやっているというのは真実ではありません。それができるならうらやましい才能ですがね。偶然に依存しているわけでもありません。なぜなら、まだ知らないというのは、ある程度予測できることを意味していると私たちは確信しているからです。子どもと共にあるということは、三分の一は確実なことであり、三分の二は不確実なことやはじめで出会うものであるという状態で働くことであると、私たちは理解しています。三分の一の確かなことがらは、私たちの（子どもに対する）理解を創り出し、さらに理解を深めたいという試みを促します」

マラグッツィは、北イタリアの小都市レッジョ・エミリアの幼児教育実践の理論的支柱だった人物です。アートを中核において、アトリエリスタ（芸術専門家）とペダゴジスタ（教育専門家）という2職種が配置され、小グループによるプロジェクトとその記録（ドキュメンテーション）に活動の特色をもつ“前衛的”ともいえる実践です。記録映画や写真集を見るだけで圧倒される感じもありますが、その基本となる教育哲学や発達観は上のことばにあらわれており、まさにここでできごとの節と呼んだ観点ともつながるものだと思います。

子どもと暮らし、ともに生活をつくりだしているのなら、計画などしなくても三分の一は確実に分かることなのだと。しかし、その三分の一があるからこそ、三分の二への期待やチャレンジが生まれるのだということでしょう。

出典：川田学『保育的発達論のはじまり—個人を尊重しつつ、「つながり」を育むいとなみへ』ひとなる書房、2019年（一部改変）